

正月とソヴェト勤労婦人

宮本百合子

青空文庫

— ヤア、こんにちは。

— こんにちは！ どうした、久しぶりだね。

— ウン。一時間ばかり暇かい？

— 何用？

— 今日は正月、ソヴェト同盟の勤労婦人たちがどんなに暮すか、知ってるだろうからききたいと思ってやって来たんだ。いつだったか支那のソヴェトの正月について面白い話をきいたこともあるから……。

— 成程。……だがソヴェト同盟じゃ正月って云つても、大したことないよ。二年ばかり前、モスクワで初めての大晦日と正月を迎えた時、どんなにやるのかと思って楽しみにした。ところが勿論日本みたいに除夜の鐘が鳴るわけじゃなし、門松立てるわけじゃなし、元旦に下宿の神さんが「おめでとう」と一言云ったぎりで普通のパンと茶を食ったよ。ヨーロッパ諸国じゃ、日本でもブルジョアが自分達の子供に玩具を買ってやるついでに貧児へ所謂慈善をほどこすクリスマスってやつ、キリスト降誕祭、あれを十二月二十五日にうんと盛にやって、その勢で大晦日正月は越しちゃうんだ。

——だって、お前、ソヴェト同盟じゃ、あんなにプロレタリアートの階級意識を眠らす毒藥として宗教撲滅運動やつてるじゃないか、見たよ、ソヴェトで出してる面白い絵入りの反宗教雑誌を。

——確にそうさ。ソヴェト同盟のその運動は革命当時から着手されていた。ところが一九二八年の復活祭、降誕祭の時はまだそういう祭りを相当賑やかにやってたんだ。……ところでこれを見たか？

——はじめてだ、何だい、この赤、緑、黄色の点ポツポツは。

——愉快だぜ、ソヴェト同盟は一九二九年の秋から暦をかえちゃったんだ。一九二八年——二九年の経済年度からソヴェトでは生産拡張の五カ年計画にとりかかった。

——そりやもう知らない者ないよ。

——この五カ年計画って仕事は、ソヴェト同盟がヨーロッパ資本主義国の生産に追いつき追い抜こうっていう、大した計画だ。アメリカやドイツの学者は、そんな計画が五十年間に実行され得たとしても驚くべきものだ。それを五年でやるなんて？　またボルシェヴィキの気違いがはじまったって嗤^{わら}つたもんだ。ソヴェトのプロレタリアートだってやさしい仕事にとりかかっちゃいけないことをよく知っている。国家計画部が先に立って、先ず一

年三百六十五日を一番生産のために有効に使うにはどうしたらいいかということを考えた。一年には五十二日曜日がある、十三日いろんな宗教的な祭日がある。祭日の前の早じまいまであつて、これまでは一年に七十三日から七十九日、工場と役所で仕事が止つた。こんな不経済をやめて、交代に五日目ごとに一日の休日をとつて本当にプロレタリアートの、記念日だけ休んで働くことにした。

——わかつた。それで例えばこの赤ボツチが、また五日目についてるわけだな。間四日が働く日か。成程順ぐり緑や黄色がやつぱり五日目ごとにある。

——ここを見ろ。

——五月一日、二日。ははあ！ やつてゐるな、二日続いた一般の祭日か。

——そこからこれを見ろ。

——ふん。革命記念日二日。それからこれは何だい？ ああレーニンの記念日か！

——ところで、どうだい、十二月三十一日、一月一日、何かあるかい！

——緑と黄色のボツチだけだ。——じゃ何だな、大晦日も元日もソヴェト同盟じゃ平日なんだね。

——その緑のボツチの番のものが三十一日に、黄ボツチが一日に休むだけだ。工場や役

所じやほかの番の者がどしどし働いてるんだ。プロレタリアートのほんとうの一月の記念日は一日じやない、九日にやるんだ。

——はつきりしてら！ 全く元旦だなんて、搾取国のプロレタリアートにとって目^{めでたく}出度もへつたくれもないわけだ。闘争の新年度第一日つてもんだ。

——ソヴェト同盟に正月つてもものないの分つたろ。

——分つた。従つて女子供が特別なことをやるつてこともないわけさね。

——女だつて、生産単位としてソヴェトでは男とすっかり同じだ。同じ労働は同じ賃銀を払われる。五日週間で働いてる。元旦だつて平日だ。番に当つた者だけが休む。特別なことは何にもない。ただ、大晦日の晩、労働者クラブで何か催しがある。芝居とか、キノとか、音楽とか、一家揃つてそこへ行つて、暖い、明るい、楽しい年越しするわけさ。

——ねえ、オイ！ ソヴェトの労働者つていうと、その話だけでも、どうも偉くがつしりしてやがるみたいだが、それでもいつかへべレケになることもあるのか？

——モスクワへ行つたばかりの時分は、よくウオツカの瓶握つてひよろついている奴を見たまんだ。焼酎みたいなものなんだから、逆もまわるんだ。道^{ぼろ}ばたへ、檻^{ぼろ}棲^{ぼろ}みたいにつつ倒れてるのも見た。革命前までロシアの労働者の飲みようと来たら底なしで、寒ぢゅう襯^シ

衣^{ヤッ}まで飲んで凍え死ぬもんがよくあった。立ち上ることを恐れた。そこで酒で麻痺させたんだ。おまけにツアーはそのウオツカの税でうんと儲けて居た。革命後プロレタリアートは自分の完全な主人になった。が彼等に注ぎ込まれた毒の作用は急に消えない。中毒して本ものの病人もある。習慣的に賃銀を受とると飲んじやう奴がある。五カ年計画で国じゅう真剣なのに、職場でこっそりあおちやくたくたしていられては堪らぬ。ソヴェトのプロレタリアートは目覚ましい勢で自己批判を始めた。一九二九年から禁酒運動の盛になったこと、文部省はアルコール中毒患者専門の療養所を開いた。キノで酒の体に及ぼす害、子孫に害を及ぼす恐ろしさ、酒が敵で心にもない反革命的行為に誘惑される実例も見せる。禁酒宣伝の示威行列も見たよ、度々。

——誰が示威行列をやるんだ。

——ピオニエールだ。婦人労働者が示威したこともある。ピオニエール、コムソモール、自覚ある婦人労働者などはいろんな社会的規律の改善にいつも先へ立って活動する。禁酒奨励運動では、女と子供が実によく働いてる。可愛いピオニエールになってる自分の息子や娘達^{りり}が凜々しく隊伍を組んで雪ん中を「酔っ払い親父を排撃する！」って赤いプラカー^ト担いで行進されちゃ、参るのさ、ソヴェトのピオニエールや自覚した婦人労働者はしつ

かりしてるからな。病院へ入れて中毒を療して貰っても、また悪い癖に戻るようなルンペンは、生産に携る勤労者として価値ないと云っていつまでもくつついて、自分達の生活をダメにさせちゃ置かぬ。

——この頃はどうかんだ？ ましか？

——ずっと増した。第一消費組合の店は土曜日、日曜日、例えばメーデーの前日、酔っ払う可能の多い日は一切酒類を売らない。ふだんでも売る店が町の中でどこときまっていた、あとは閉められたのが多い。酒場も減った。酒場でも店でもアルコールの強い酒は売ることを許されない。

——ところで、じゃ一月九日——一九〇五年の「血の日曜日」の記念だろう？ それはどんなにして行われるんだ？

——昼間は普通だ。働く。夜クラブが催しをやる。一九〇五年の革命が世界プロレタリアート解放運動史の上にどんな重大な意味をもっているか、革命的プロレタリアートはどんな歴史的使命をそこで果たしたかを短く演説する。

——男も女も行けるんだろう、そのクラブへは。

——そうとも！ 家じゅう行くんだ。婆さんも孫も、赤坊だって行くよ。

——本当か？

——プロレタリアートのソヴェトは、女を封建的に台所の中やオシメのまわりをうろつかせては置かないんだ。女が働く工場には托児所がある。女が男と一緒に芝居を見、演説をきき、時には自分だつて演説するクラブの中には大抵「母と子の室」がある。そこに清潔な寝台がある。壁に「赤坊は自分の乳で養え！ 牛は人間の子の為に乳を出すのではない」とか「赤坊に規律正しく乳をやれ」とか、プラカートがかかてる。そこへ赤坊を寝かせておけば、責任をもつて見てくれる者がいるから女は安心して演説をきいていられるんだ。

——そうでなければならぬように出来る。それから、

——時には、一九〇五年の革命を目撃した労働者の思い出話もされる。一月九日を記念した詩が本ものの朗読者によつて音楽に伴れて朗読される。クラブ劇研究員の芝居、ピオニエールの分列式。ピオニエールの活人画みたいな劇、移動劇団がやって来て大道具をつくつて芝居する。キノがある——記念すべき一晚をゆつくり、集団的に、楽しみの裡に階級的意識を鼓舞されつつ過すのだ。

——……ソヴェトの労働者たちが世界プロレタリアートにとっての記念日だけを本当の

祭日にしてるところは、さすがだ。そして、その祭日の過しかたも各々家へ引こんで個人主義的にやるんでなしに、クラブへ集つてやるところもソヴェトラしい。

——なかなか勉強になると思うんだ。あつちのやりかたを見ると。苦しい時だけ、争闘の必要が起つた時だけ、急に工場でかたまるんじゃない。ふだんから、機会ある毎に楽しむ時にも男も女も集団的にかたまつて、階級としての団結力の強化をはかつてる。

——然し、ソヴェトは建設期だろ。階級としての富農や成金に対して断然指導勢力を持つてるのはプロレタリアートじゃないか。

——そうだ。特に五カ年計画の三年目になつてる現在では、国内の問題でプロレタリアートが階級的に揺ぐ点なんか在于かない状態だ。が、忘れるな。プロレタリアートは階級として地球をぐるりと一まわりしているんだ。地球六分の五を占める資本国でプロレタリアートがどんな情勢の下にあるかということこそソヴェトの男女は念頭にもつてる。それに、ソヴェトの社会主義建設にヨーロッパ、アメリカの資本家はどんなにヤツキになつてゐるか。それは公正で紳士的（？）だと云うのを表看板にしているイギリスの第一流新聞タイムスが、書いてることを見たつて分る。そのことも階級的立場からはつきり知るのだ。

——ほかに鬱^{うさ}はらしのしようがなかったんだな、きっと。

——それも一つだ。その時分、お前、東京で云えば銀座みたいなところを降誕祭や復活祭の時労働者は歩いちやいけなかったんだぜ、劇場だつて入れなかったんだ。

——それどころか学校もだろ？

——そうだ。搾取者はその専制に対してプロレタリアートが階級的団結の下に立上る、うかうかしちやいられないんだ。

——そうだとも。男だつて女だつてプロレタリアートなら、ボヤボヤ炬燵こたつにもぐつて正月してるものはないさ。

——一九三一年は一つ俺たちの暦でやろう。

〔一九三一年一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第九卷」新日本出版社

1980（昭和55）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本「宮本百合子全集 第六卷」河出書房

1952（昭和27）年12月発行

初出：「戦旗」

1931（昭和6）年1月号

※「――」で始まる会話部分は、底本では、折り返し以降も1字下げになっています。

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正月とソヴェト勤労婦人

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>